

神様を喜ぶ

[聖書] 使徒言行 3章1～10節

ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとすることを見て、施しをこたえた。ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。その男が、何かもらえんと思って二人を見つめていると、ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりと、躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しをこたえていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。

[序] はじめに

和歌山県白浜で、三段壁（さんだんぺき）という所謂自殺の名所と呼ばれる場所近くの教会の牧師で、「白浜レスキューネットワーク」の働きをされている藤藪庸一先生という先生がおられます。以前 FEBC のインタビュー番組でもお話し下さったこともある先生ですが、「あなたのいのちを諦めない—死にたいと思っているあなたへ—」という題のトラクト（小冊子）を出されています。今日はまずその文章を、抜粋しながら、読ませて頂きたいと思います。そして、今日与えられている聖書の箇所を味わわせて頂きたいと思っています。

[1] 「死にたいと思っているあなたへ」

<考えてみてください。もしも、今抱えている問題が一つ一つ解決に向かえば、楽になりませんか。やり直してみる気持ちになりませんか。今、あなたに必要なのは死ぬことではなく、生きるための助けなのです。

私は小学生の頃、「あなたは神様に愛されています」と言われることがうれしくて、教会に通い続けました。両親に愛され育った私は、幸せな生活を送っていました。決して、愛情に飢えていたわけではありませんでしたが、教会で聞く「あなたは神様に愛されています」とのメッセージは、さらに、私の存在をそのまま包み込み、多感な時期の私の心を、幸せな気持ちで満たし続けてくれました。

小学六年生の時、飢餓で苦しむエチオピアとカンボジアの難民キャンプの映像を見た私は、一円玉募金を始めました。でも私は、小遣いのほとんどを使ってしまって、残った十円、二十円を瓶に溜めていったのです。つまり残り物です。そんな時、父に読み聞かせてもらった『ビルマの豎琴』という小説に感銘を受けました。主人公の水島上等兵が、ビルマに残り、戦没者の魂を弔う道を選ぶその姿に、考えさせられました。彼の人生の全てを捧げる生き方

と、小遣いの残り物です。私の一円玉募金の違いがはっきり分かりました。私も、誰かのために犠牲を払うことのできる人になりたいと、水島上等兵に憧れるようになりました。

そんなある日、聖書にあるイエス様の弟子ペテロの、足の不自由な物乞いに対する言葉が心に響きました。「私たちを見なさい。金銀は私たちにはない。しかし、私たちにあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり歩きなさい。」—金銀はないけれど、でも、自分にあるものをあげようと、足の不自由な物乞いを立ち上がらせ歩かせた、そんなペテロの姿に心が留まりました。苦しんでいる人、困っている人に、「神様はあなたを愛していますよ。大丈夫、助けてくださいますよ」と伝え、犠牲を払って助けの手を差し伸べることのできる人になりたいと思ったのです。

もちろん、生きるって苦しい、しんどいことが多いと思います。その中で、「生きる意味がわからない。生きていてもしょうがない。」「自分は、親や周囲の人に、望まれて生まれてきたわけではない。」「自分は生まれたくて生まれたわけではない。」と言う人もいます。しかし、私はこれらの答えとして、自分自身を超えた存在、神様の存在を信じています。命そのものを与えてくださった存在です。神様に与えられた命だから尊いし、生きることには意味があると信じています。今の苦しみにも意味があり、生きることを諦めてはいけないと思っていますのです。神様にはご計画があって、私は今、意味があってこの苦しみを通っていると受け止めているのです。

もしも、あなたが自ら命を絶ってしまったら、あなたに関わりのあった多くの人が苦しむことになります。あなたが縁が切れたと思っている人も、疎遠になっている人も、「あの時こうしていれば…」と自分を責めることになります。身近な人ならなおさらではないでしょうか。周りの人が感じる取り返しのつかない喪失感や後悔の念は計り知れないものなのです。これが、あなたがかけがえのない存在だという証です。今はそう感じられなくても、あなたがなくなった世界では、あなたが大切な存在だったと気づき苦しむ人が起こされるのです。苦しい今だからこそ、この事実を知って、自分の価値をもう一度考え直してみてください。死にたいと苦しむあなた。助けてと近くの教会に助けを求めてください。一人で悩むのをやめて、助けを求めてください。あなたは神様に愛されています。 >

[2] 絶望に慣れてしまう私たちに向かって

藤藪先生たちのお働きによって、既に千人近い方が自殺することを思いとどまり、新しい生き方を始められました。本当に尊いお働きです。「自殺」を良くないことと言うのは簡単ですが、しかし、そこに至る迄の心はその人にしか(にも?)分からないことだと思います。

最近とてもよく読まれている本にアルベール・カミュの『ペスト』(1947年)という小説がありますが、その中にこういう言葉があるそうです。「絶望に慣れることは、絶望そのものよりもさらに悪いものである」。—絶望に“慣れる”というのですね。恐い言葉です。けれども私たちは、確かに、絶望に抗うその力も失せてしまって、絶望の中に安住してしまうということも

あり得ると思うのです。正に「死に至る病」とも言えるのかもしれないと思いますし、或いは、その時、魂は既に死んだ状態であると言っても過言ではないのではないのでしょうか。

人間には人間を救うことは出来ないということ、そのことを藤藪先生はよくご存じです。またご自分の無力さもよく知っておられます。その時は命を取りとめても、やがて自ら死を選んでしまわれた方もおられるそうです。その先生の今のお働きと信仰の原点ともいべき聖句が、今日のテキストの使徒言行録の箇所だったということ、私はそれにハッとさせられました。弟子ペトロが、生まれつき足の不自由な物乞いの人にこのように語ったとあります。

「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」(使徒 3:6)

この生まれながら足の不自由な男は、神殿の外の「美しい門」の所に“毎日”置かれていて、神殿にやってくる者たちの施しによって生きていた人です。ただ生物的な命を保持し、生きる意味を喪失している、そのような絶望に「慣れて」いたとも言えるのではないのでしょうか。お金の力は、その肉体の命は保つかも知れませんが、彼の心は、魂はどうなののでしょうか。彼は足が動かないだけじゃない。心がストップして何の喜びもない、神殿の前の門に置かれることの繰り返し。この悲しさを、もう彼は悲しいとも思えなくなっていたかもしれません。

そのような中、ペトロが語った言葉は、彼を死から命へと呼び起こす言葉でした。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」私があなたに提供できるのは金銀（お金）ではない。それでは実は本当の解決にはならない。ましてや、私自身の力であなたを救うのではない。真に死んだようなあなたを立ち上がらせるのは、主イエス・キリストなのだ、と。ペトロは「イエス・キリストの名によって」と言いました。これは、イエス・キリストご自身＝その命によって、と言っても良い言葉です。私という存在を本当に生かす力は、自分自身の中にあるのではなく、私の「外」にある。イエス・キリストという方が、私を、またあなたを支えるのだと。

主イエス・キリストが、人間を救うことが出来るのは、その十字架によるものだと思います。この生まれつき足が悪く自分で立てない男というのは、生まれつき神様との関係に生きるということを失い、自ら立てなくなり、絶望している人間、つまり私たち全ての者のことではないのでしょうか。しかし、そのうずくまり、自分ではもうどうしようもなくなってただ遅かれ早かれ死んでいく存在でしかない私たち人間目がけて、主イエスは来て下さったのです。それが十字架です。ローマの信徒への手紙の3章にある通りです。—「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより、無償で義とされるのです。」(ローマ 3:23~24)。ペトロが「持っているものをあげよう」といった「持っているもの」とは正にこのことでした。ペトロは「私を見なさい」と言いま

した。ちゃんと見なさい！と。あなたを訪れている神様の救いに目を留めなさい、と。

【結】 神様を喜び、賛美する者へと

彼は呼ばれてどうなったのでしょうか。3章7節と8節です。「そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。」—これは肉体の回復、癒しということが主眼ではないと思います。神様との関係に生きることを失われていた人が、今、神様を喜び、賛美する者になった、という話です。私たち一人ひとりに神様から与えられている「人としての尊厳」の回復の物語です。足が萎えていた彼は、神様の呼びかけによって自分で立ち、その足で最後は、ペトロとヨハネと共に**讚美しながら神殿に入っていった**のです。新しい人生は、**神様を喜び、心に讚美が生まれる人生**です。

生まれつきの肉体は、まず足が弱くなるということが多いですよね。それこそ、足やくるぶし、ひざが弱くなってきます。神様を信じればそれが元気になるという話ではないと思います。たとい肉体は衰えて行っても、「外なる人」は滅んで行っても、「内なる人」は、**聖霊**によって、日ごとに新しくされるのだということではないでしょうか。私たちの「いのち」は、**神様に根拠**があります。私たちのいのちは、**主がご自分の命を投げ出して下さったほどのいのち**なのです。神様に背を向けていた者をも、**賛美する者へと造り変えて下さる**、そんな計り知れない愛をもって私たち一人ひとりを愛して下さいます。そして今、地上にあって、神様の命、永遠の命の中に生かして下さいます。

この**新型コロナの感染**が広がり、私たちの命は、或る意味脅かされていると言えます。ある人の言葉に私もそうだと思ったのですが、このウィルスから完全に守られる場はどこにもなく、共存せざるを得ないだろう、そうでないと、人と人とが会おうということが失われる世界になり、経済活動はもとより文化もスポーツも生命力を失う、と。恐らく社会的距離の確保などはコロナ後も必要になってくるでしょう。けれども、**私たちを根底から支えているものはコロナではなく、キリストの愛です。キリストの赦しです！** 東八幡教会の奥田知志先生は「ステイホーム」ではなく「**フロムホーム**」が大事だと仰っています。ホームに留まるのではなく、ホーム「から」です。社会的距離を保ちつつ、愛をもって共に生きる生活を作って行こうと。本当にそうではないでしょうか。主を喜びとし、讚美しながら、この主の愛に生かして頂きたいと思います。教会そのものが問われている時だと思います。お祈り致します。

主よ、あなたは「人は全世界を手に入れても自分の命を損したら何の得があるだろうか」と仰いました。本当にそうだと思います。そして私たち一人ひとりを愛し、本当に生かすために、あなたは十字架で命を献げて下さいました。私たちが出来ることは、あなたを喜び、周りの人と共に生きることです。今週も私たちを捉えて下さい。主の御名によって。アーメン。